

シリーズ 水にまつわる話(4) — 千畑町 —

田沢疏水は、田沢湖町、角館町、中仙町、太田町、千畑町、六郷町、仙南村の七ヶ町村に跨っています。順次各町村の水にまつわる話を執筆して載せ紹介します。第四回目は千畑町です。



土崎部落「トゲウオを守る会」

会長 佐藤 龍太郎

大清水の今昔

千畑町土崎部落には二十箇所の湧水があり十箇所には絶滅危惧種のイバラトミヨ雄物

(しず)は、大しず、野際しず、古屋敷しず、古しず、仁兵衛しず、弥之助しずがありますが、この度「大しず」のことについて述べてみたいと思います。

私の家から百メートル位しか離れていない「大しず」は面積約三アールもあり一寸した沼をおもわせませす。周囲には直径二尺もある樹木が茂りその木に巻きついた藤などは大蛇を想わせる太さでからみ合い、鬱蒼とした情景は神秘的な情緒をかもしだし、霧雨の降る日などは水蒸気が立ち

上がり、かすむ泉を視る人々を驚嘆させます。

この「大しず」の水源は田沢疏水の開田前迄は土崎林が源でした。榎、栗、胡桃、たも等、雑木の太木が生い茂る林で八幡殿から飛沢迄延びていたその林を土崎林と呼び「水源涵養保安林」として保護し木の伐採や柴も切ること

も厳重に守られてきました。秋には栗、あけび、きのこ、なかには、まい茸も生える木もあり、湧き水の流れるジャングルであり、子供の頃は栗拾い、きのこ採りもよくやったものだ。

大しずの湧水を灌漑用水に使用する面積は六千ヘクタールもあり、上堰と下堰に区分

され上堰の水口は二メートル一〇センチ、下堰の水口は二メートル四〇センチ、その胴木の長さは六メートルで一本の角材で造られ水の落ちる部分を削り落としている。北側は切出石で積重ねられ苔が生えて年数の深さを感じさせます。南側には水の神を祀る水波賣大神の社が建っている。

水源確保のため毎年五月上旬堰払いを行う堰頭は上堰と下堰に一人づついて堰払いの通知を堰子(受益者)にだす。下堰払いは上堰払いより一日早い。下堰は水路巾もあり延長もあるため大しずの中は上堰で払うことに決まっている。「しず」の底は砂利層で泥は少なく水生植物とえび草が生えている。えび草には多量の横えびがついている。

これがイバラトミヨの餌だ。昭和初期の頃はイバラトミヨだけでなく、アブラハヤ、すなやつめ、鮎、鯉などもいて魚は豊富だった。木の葉や木の枝を取除き、水草や泥、小砂利もあげる。昔は水量も四〇センチもあったが今は深い所で三〇センチ位だ。「しず」の清掃は男だけの仕事で女は

「しず」の中には入らない。昔からの習わしだ。一年に一回の「しず」払いだが終了後は伊勢の皇大神宮の五十鈴川の清流を想わせる程きれいだ。大しずの湧水は泉底からも湧きでているが主に南東の岸辺から流出している。

奥羽山脈からの雨水が地下に浸透し扇状地が形成され、その扇端が湧水(しず)となって湧き出ている。田沢疏水の開田前迄は土崎部落は湧水(しず)にたよっていた。飲料水、生活用水、農業用水は勿論ですが、日照りの年などは水騒動が方々におきていた。それが解消されたのは昭和三十一年以後田沢疏水による開田工事施工後であります。統計にもある通り一年間で大しずも弥之助しずも湧水量の変動が大きく最も増加するのは五月から八月迄であります。最も低下するのは一月から二月であります。大しずから南に百メートル位の処に「弥之助しず」があります。

「弥之助しず」があまり大きくないが湧出量はものすごく、平成十二年六月に秋田大学教授の肥田先生と大曲市の栗林

先生が「弥之助しず」の湧水量を調査に来た時、その湧水量をみて栗林先生はこれだけの水があれば大曲市民の飲料水が賅る。どうにかしてもっていくことができないかと言ったことが印象に残っています。

田沢疏水で五月に取水してくる水が地下に浸透し各所に存在する「しず」の水量を増加させ農業用水ばかりでなく、イバラトミヨの生息条件も整い営巣活動が活発化して産卵することができず。田沢疏水の取水は農業用水ばかりでなく生物も潤してくれる計り知れないものがあります。

「水のないところには人が住めぬ」といいます。「大しず」と「弥之助しず」の下流の田圃から縄文時代の生活を偲ばせる集落跡が発見されました。土崎小荒川地区圃場整備事業の区域内の中屋敷地区を具埋蔵文化財センターで発掘調査の結果縄文時代中期の堅穴住居跡であることがわかりました。中期後半四千五百年から四千年前の集落跡で、出土品は整理用コンテナ箱で

百七十箱の土器や石器類がみつかり中屋敷遺跡は縄文時代は勿論平安時代中世、近世の生活の場となっていたことがわかりました。

いま「大しず」周辺も変わろうとしています。周囲の立木を残し遊歩道を設け公園化することを模索しています。下堰は二百メートルの石積工法にして湾曲部分を多く採り上げ水草植物の繁茂を考慮し

イバラトミヨの生息と営巣活動が活発化されることを配慮したせせらぎに施工されています。片側に幅員五メートルの農道を兼ねた散策道を設けイバラトミヨの生息を観察することができます。今後土崎部落の豊かな湧水を守りイバラトミヨを後世に残していくには地域住民の環境保全に対する決意と維持管理が必要だと考えられます。